

目的 日本においては、昔から性の問題をタブーにする傾向があつた。これが性教育を推進するにあつて、大きな障害となつてゐる。しかし、現代のように性に関する情報が氾濫し、興味本位に扱ふ記事が多く、青少年の意識・行動に影響を与え、性非行・十代妊娠などの憂慮すべき事態の中で、性教育にいかに行われなければならないかを模索した。

方法 広島県立高校1年生男子161名・女子172名についてアンケート調査を行い、第二次性徴における特質について調査し、文献研究も行った。

結果 初潮・精通現象年令の前傾による発育促進現象が誘因する性教育上の問題として、人格形成の未成熟である子供たちの心理的不安を除き、却つてよろこびとさせたい。また第二次性徴期の情報源として、女子の場合は「学校の先生」が過半数を占めてゐる。しかし、男子の場合「友人」がトップをしめ、次が「学校の先生」「雑誌」となつてゐる。生理のことで女子をからかつたことのある生徒を調べたところ、低学年で女子の生理のことを知つた者ほど、その率は高く、また友人を情報源とした者は、その率は高いことがわかつた。性教育は現代の教育において、新しくとりあげられるようになった問題である。学校で行う集団教育としての役割と、家庭生活をとおしての性教育は、ともに大切である。性教育とは性器の構造や作用を教え、妊娠・出産などの知識教育だけではない。男女の正しい人間関係を、もの心つきはじめた頃から教え、長じて真に民主的な心のやさしさを持つた人間に仕上げなければならない。生命を大切にし、異性を尊重する意識と感情を育てなければならない。性教育とは人間教育である。